



わたしの聖戦

女性が働くことについて

198

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

アカデミズムという名の怪物

アカデミック、またはアカデミズムという言葉は、学問とか大学とか学問至上主義などと訳され、普遍的に使われている。その起源は古く、古代ギリシャの哲学者プラトンに由来するという。学問の発達の中には、人々の生活の豊かさがあ

る。：はずだ。アカデミズムには、理論重視という概念が含まれているが、いずれにしろその結果は人々に還元されなければならぬ。例えば、数学はネット社会には欠かせない基礎学問だ。ネット検索もAIの台頭もすべて数学が基礎となっている。いわゆる理系分野の研究結果は、私たちの生

活の利便性を向上させる身近な学問として位置付けることができる。しかし、そうではない学問や研究も存在する。おおまかなくくりでいえば文系と呼ばれる分野がそれだ。文学や歴史、哲学などはそれに携わる人の好奇心をおおいに喚起し学問としても非常に魅力的である。しかし、一般の人々の生活に寄与しているかといえ、残念ながら直結はしていない。どこかの旧家の蔵から歴史上珍しい文書が発見されたとしても、それはあくまで歴史的学問的な意味においてであり、我々の暮らしや生活とはほとんど関係がない。たまたま、

古墳の発掘作業によって、年代区分が大きく変わったり、人類史に影響したりすることがあるもの、今や、文系の立ち位置は理系よりも肩身が狭いかもしれない。それでも、夢を抱かせる学問として貴重であることに変わりない。



一方で、人と接してケアをする仕事の代表格である、看護や介護の分野でもアカデミズムが必要とされるようになった。ここ数十年で看護系福祉系の学びは専門学校ではなく大学で行われることが多くなり、学ぶ学生も専門学校より大学のほう

に魅力を感じるらしく、専門学校から大学という看板に衣替えしただけで、入学志願者が飛躍的に増えるという。彼らは学校卒業とともに国家試験に合格して資格を得、病院なり施設なりで仕事をすることになるが、大学で学んだ有資格者は、さらに大学院に進んだり、海外に留学したりと、現場ではない場所を選ぶことも多い。つまり、病む人困っている人をケアする直接的な仕事ではなく、アカデミックな世界に惹かれるというわけだ。

ここで疑問に思うことがある。看護や介護の世界にアカデミズムは必要なのだろうか。いくら優れた論文を書いたとしても、患者たちに心ある言葉かけさえできないのであれば、その論文や研究にどれほどの意味があるというのだろうか。アカデミックが、でないとはいわれないが、どちらを重視するかと問われれば、やはり現場での仕事が優先されるべきだろう。痛みや死の恐怖を訴える患者の側に寄り添い、ともに時間を過ごすことの崇高さは、論文をひとつ書くよりはるかに高く、深い。

アカデミックは必要だが、分野によってはそれが最上でもないし、すべてでもなく、こだわり過ぎて振り回される必要などまったくない。しかし、研究者と呼ばれる方が、汗水流して働くよりも評価が上であるかのような印象が強くなるのも確かだ。そのような思い込みや風潮を、私は「アカデミズムという名の怪物」と呼んでいる。

ただひたすらに自分の人生を生きる。そう強く願っていたら、怪物などに翻弄されることはない。間違った価値観は、結局は自分を追い詰める。怪物に、負けるな。

イラスト・伊藤栄章